

## ハメルンの笛吹き

一二八四年六月二十六日、伝説によると、有名なハンノーヴァーの都に近い、ブラウンシュヴァイクの由緒ある古い町ハメルンで、世にも不思議な事件が起った——おそらく読者のうちには「ハメルンの笛吹き」The Pied Piper of Hamelinと題された、ロバート・ブラウニングの一詩を御存知の方も多いただろう。異様な、験げんの悪い人相をした鬼を思わせる目付の、奇態な服装をした男——ハメルンの善良な市民で前にその男を見かけた者はひとりもいなかった——が市役所にあらわれて、なにがしかの金額と引換えに、町中にはびこるおびただしい数の鼠を退治しようと申出たのである。これらの鼠が十二世紀ころ初めてヨーロッパに出現した黒い種 *Mus rarus* に属したことはほぼ確実で、この鼠の大量出現の真実性については、いまなお多くの口碑伝承が存するほどである。——その伝説の中には鼠に喰い殺された三人の坊様の話も含まれているが、ケルンの司教のアドルフは一一二二年、鼠によって食われてしまったという。ハメルンの市民が自分たちの生命について危険を覚えたとしてもいわれのないことではなかったのである。それで市民はこの見知らぬ男の申出を喜んで受けた。すると男はたちどころに笛を取り出して、かつて誰も聞いたこともないような、いかにも奇妙な音楽を奏した。すると何百万、何千万という鼠の大群が男のまわりに寄って来た。笛の音に惹かれて鼠どもが次々と巣や穴から出て来たのである。そして鼠の大群はその男に従って水辺へ行き、男の音楽に惹かれてそのまま水中へ落ちこみごとごとく溺れて死んでしまった。ところが市長も市役所の助役も約束の金額を支払うことを拒んだ。すると男

はまた笛を取り出しておもむろに一曲吹いた。すると町中の子供たちは皆その笛の音に惹かれて、その男の後ろに次々と従った。親たちはあわてて引きとめようとしたけれども、子供たちはいうことを聞かない。そして悪魔のような笛吹きはハメルンの百三十人の子供たちをコッペンベルクの大きな山腹へ連れて行った。山腹はぽっかり口を開けて子供たちを迎え入れたが、それきり岩の口を固く閉じてしまい、子供たちは帰ろうにもはや帰れなかった。わずかに一人だけ、跛びこで、仲間が遅れた子供だけが、難を逃のがれた。「まだら色の服を着た笛吹き」の後ろについて行ったハメルンのほかの子供たちの消息はそれきり杳やまとして絶えたのであった。

以上述べたことは、この珍しい民話を一度聞いたがもう忘れてしまった人のために、あるいはブラウニングの半ば冗談風で半ば怪談風の詩を御存知でない人のために、伝説上の事件の大筋をはっきりさせる目的で、筆者が要約したものに過ぎない。ところでここで注意しなければならない点は、この同じ伝説が実はヨーロッパの別の地方では別の形で存在している、という点である。ハメルンとは別の怪しい笛吹きがロルヒの子供たちを同様な理由でタンネンベルクの山中へ笛の音にのせて連れ去ってしまった。魔法使いのヴァイオリン弾きがブランデンベルクの子供たちをやはり音楽でもってマリーエンベルクの山中へ連れ去ってしまった。これらの伝説の中でもっとも人口に膾炙かいてんしているハメルンの笛吹きの事件の年代は、すでに述べたように、十三世紀の後半、一二八四年六月二十六日のことと推定されている。しかし鼠に喰われてしまった有名な人物の数多い伝説は——その伝説の一つが詩人ロバート・サウジーに有名なバラードの主題を提供したのだが——それよりもずっと古いもののものである。ヨーロッパにおける鼠による大災害はその前の世紀、黒鼠が東方から第一回の大移動をした後で、発生している。民衆の空想力に強烈に訴える異常な諸事件が、しばしば時間の経過とともに誇張されて神話と化したり、非常に歪曲されてそのために歴史的に認知不可能となることはよく知られている。だとすると、ハメルンの笛吹きの不思議な物語が十三世紀のヨーロッパで実際起った異常な事件に端を発したのではないか、と推測することもまた許されるのである。伝説の中で鼠に関する部分はそれより前の時期のもの

と推定してよいであろう。「ハメルンの笛吹き」という神話には区別し得る二つの要素がある、と考えてよい。別の言い方をすれば、本来別々であった二つの神話が、不思議な形態変化のプロセスを経て、一つのものとして混りあつた、といつてもよい。単純な事柄も、この不思議な形態変化のプロセスを経ると複合的な物語に化するのである。いずれにせよ、鼠神話の起源の方は判然としないが、行方不明となつた子供たちの話の方はきわめて特異な歴史上の一事件、あるエピソードに端を発していることはほぼ明瞭であると思われる。その事件は、笛吹きの男がまだら色の服を着てハメルンの町に入るとおおよそ半世紀前に起つた。

それは奇妙な徴候、奇妙な疫病の時代であつた。真実の狂気の時代——迷信から来る狂気、宗教的高揚から来る熱気、正氣を失つたとしか思えぬ犯罪の時代であつた。それはまた魔法の時代、精神的にも肉体的にも不純なことの多い時代であつた。——それはまた癲病の世紀であり、それに引続く熱狂的な癲癇性舞踏病その他の空恐ろしい病気がはやる、一層悪化する時代の前ぶれの時期でもあつた。恐ろしくない事でもグロテスクな事が多かつた。悪意のない事でも馬鹿げた事が多かつた。——なにしろ民衆は全くなにも知らずその上恐怖にさいなまれていたから、何でも信じ何事でもあえて行つたのである。そしてその神経的に興奮しやすいた状態は後には舞踏病の大流行となり鞭打ち苦行者の行列や行進となつたのだが、その神経的興奮状態は異常な感情の高揚となつてあらわれ、それがついに少年十字軍と少年巡礼者の群を生み出すにいたるのである。それらの精神状態は、ヘッカーでさえも認めるように、深遠な心理研究の難問として長く将来に残る課題に相違ない。少年十字軍の運動は少くとも三つあつた。第一回は一二二二年で、第二回は一二三七年。第三回は一番重要性の少ないものだが一四五八年まで起らなかつた。ここで話題に取りあげる必要があるのは最初の大量な子供たちの出国事件ともいふべき第一回少年十字軍であるが、この少年十字軍自体が数箇の別個の移民運動から成立つていたのである。

ドイツのケルンとフランスのヴァンドームでほとんど同時に二つの膨大な数の子供たちの大群が集つた。これは天の声によつて靈感を得たと信じた——あるいは信じた振りをした少年預言者たちの呼び掛けに子供たちが応じたためである。大部分は男の子だつたが、女の子も数千人は混つていた。指導者格の預言者の名前はクロワの少年エチエンヌとケルンの少年ニコラスとして歴史に伝わっているが、二人とも年のころ十二歳ほどであつたという。このフランスとドイツの少年は不信の輩、回教徒に対する十字軍を説き勧めたが、しかしそれは異端征伐の流血の十字軍ではなくて、祈禱——幼児や乳呑児の口から洩れる祈禱——によつて不信の徒を破る、祈りの十字軍であつた。少年たちは地中海までは歩くことになつて来た。そこまで来れば海は、かつてイスラエル人の前で紅海の水が左右にわかれたように、左右にわかれ、子供たちは乾いた土を踏んで、パレスチナまで行けるはずであつた。そこへ着いたならば少年たちは回教の指導者たちをキリスト教に改宗させ、異教徒たちにキリスト教信仰の洗礼を授け、十字軍に鎧をまといつて参加した多数の王侯貴族も騎士たちもよくなし得なかつたことを、自分たちの祈りと信仰によつて、成就するはずであつた。この伝染性の興奮はこのような勸説によつてあつたという間に抜まつたが、それは我々近代人の頭脳をもつては完全に理解され得ぬなにかであつた。なにしろ幾つもの町ではこの感情に訴える疫病ともいふべき現象のせいで子供たちはことごとくやられてしまつたからである。親が理屈で説いて聞かせても、説教しても、涙を流しても、いや力づくで抑えようとしても、この伝染病に打勝つことはできなかつた。親が鎌を掛けて子供たちを閉じこめれば、子供たちは発作や痙攣を起して死亡するか、憔悴して果てるか、のいづれかであつた。その神経病的高揚状態におちいれば子供たちは理屈に耳は貸さなくなるし、肉親の愛情に目もくれなくなる始末であつた。そしてこの偏執病的症状は、貧乏人や中産階級の間にひろまつたばかりでなく、貴族の家庭内にも浸透し、城館から騎士や男爵の世嗣の御子をも外へ、外へと連れ出す始末であつた。ついにはこの気違い沙汰を取り鎮めるために強硬措置を取るよう主張した人々に向つて「少年十字軍を取静めようとするが如きは神をおそれぬ異端の行為である」という非難が発せられるようになった。こうして七万余の家族が、迷信と宗教的熱狂の連合した力によつて哀れにも親の權威を奪われてしまつたのである。わずかの間隔を置いて二

つの武器を持たないドイツの子供たちの集団——そのほとんど大部分が年齢十二歳以下だったという——がケルンを出発して、地中海さらには聖地へ向うべく陸路を南下した。その第一団は有名なニコラス少年が先頭に立ち、第二団は姓名不詳の少年が先頭に立った。その人数の総計は四万人であったと信じられる。中には多数の女子も混っていた。同じ月に、今度はフランスの子供たちの一隊が同じ「十字軍」に参加するべく、エチエンヌ少年の指揮下にヴァンドームを出発した。彼等の人数は少くとも三万人はあった。ドイツの子供たちは、將軍たちでも横断するのに非常に困難を覚えた、あの恐ろしいアルプスの峠を通過して、海を目指してイタリアへ南下した。モン・スニの峠を踏破した時、ニコラスの一隊は一万三千人の子供を失い、他の一隊はザンクト・ゴットハルトの峠で一万七千人を失った。フランスの隊はマルセーユへ着くまでに二万人に減ってしまった。熱と餓えとにやられて少年十字軍が進んだ道筋には死体が散乱したという。これらの十字軍に参加した七万人の子供の中で、後に親もとに消息が伝わった者の数は二万名にも及ばなかった。命を失わずに済んだ大多数は、実は少年十字軍の行進から落伍した少年少女たちで、ハメルンの笛吹きについて行けなかった跛の少年だけが難を免れた様に似ていた。

ドイツ人の子供のうち三万人が失われたことは知られているが、フランス人の子供のうちおよそ一万五千人は二度と故郷の土を踏めなかったものと思われる。ニコラスの一隊はジェーノヴァの港に着いた時、すでに悲惨なまでに人数が減少していたが、地中海は彼等を通すべく左右に開いてはくれなかった。一隊はほとんど解散状態におちいったが、それでも何人かの子供たちはビザの港まで行き、そこから船で聖地へ向った。姓名不詳の少年を指導者とする一隊はイタリア半島の東南のプリンディシまで徒歩で南下し、そこから「パレスチナへ向け船で運ばれた」——多分聖地へ向けて運ばれたのだらうが、それはこの世の聖地ではなかったのである。多数のドイツ人子女が奴隸として回教徒へひそかに売り払われたと信ずるに足る理由もある。五千人のフランスの子女も同様に悲惨な目にあつた。というのは二人の狡猾なマルセーユの商人が子供たちを「聖地向けの船に乗るよう」誘つておいて、死なずに船旅を了えた子供たちをい

よく全員回教徒の奴隸売買の商人に売ってしまったからである。子供たちの中にもエルサレムの土を踏んだ者がいたとするならば、それは奴隸の身分でエルサレムへ行ったに過ぎない。

こうした不幸な少年十字軍に関する歴史的資料は、あらゆる断片にいたるまでザプリスキー (George Zaluskie) あるいはヘッカー (Hecker) の少年十字軍についての文章中に収められている。これらの作家は十字軍に参加したドイツの少年少女たちの悲惨な運命を詳細に述べているが、それを讀むと生還できた子供の数は、筆者が先にあげた概数をさらに下廻るのではないか、と思われる。分別があり義侠心に富んだジェーノヴァの市民が大勢の少年少女を助けてくれた。しかし殺されたり、誘拐されたり、奴隸として売られ飛ばされたり、飢餓や艱難辛苦のために死亡した大多数の者はさぞかみじめな目にあつたに相違ない。女の子の中で生れ故郷へ帰りついた者はごく少数であった。ヘッカーはこの少年十字軍の運動を、動物の大移動の際に見られる本能的な大衝動に比較している。ちょうど動物の集団的移動の後からは必ずそれを獲物として狙う一団が尾けて行くように、こうした少年十字軍の子供たちの後からは、最初から最後まで、それを獲物としてつけ狙う人間——人さらい、泥棒、女術、怪しい商売の男女——が尾けて行った。こうしたいまわしい連中は少年十字軍をいわば鴨にしてしこたま儲けたのであつた。金銭も儲けたし、人肉商人としても儲けたのであつた。

今日の病理学の最高権威をもってしても確定できないこの衝動は、当然のことながら多くの人によって悪魔的起源を有する衝動とみなされた。なにしろその衝撃のために十三世紀のヨーロッパでは地方によっては少年少女の人口が激減してしまつたからである。カトリックの僧侶たちもこの運動を「サタンの仕掛け」といつて非難した。しかしその僧侶たちは実はこの少年十字軍の運動が法王イノケンティウス三世が大人たちがいま一度十字軍の遠征を行わせようとして、その刺戟として企んだ仕掛けであつたことを、実は知らなかつたのである。また別の人たちは少年十字軍を魔法にかけられたせいだと主張した。またそれとは別の人々はそれと同時に数多くの精神障害の徴候——たとえば女が素裸に

なつて市中の街路を走りまわつた——があらわれた、と証言している。実際当時は自由に口をきくのも憚られる時代であつた。うっかりしたことを言えば異端扱いされかねなかつたからである。多くの人々は心中ひそかに預言者を魔法使いと同等視していた。それだからニコラスとかエチエンヌとかが少年十字軍の運動を唱導したことは、迷信深い人々の口にかかつて歪められると、じきに「魔法使いの笛吹き」の伝説に化してしまつた。事実、ニコラスは狂気という調子に合せて笛を吹いて、多くの町の子供を山中へ連れこんでしまつたのである。山がその氷の牙でもつて子供たちを引き裂き、玄武岩の顎でもつて少年少女をむさぼり喰つてしまつたというあの無気味な伝説は、歴史によつて裏打ちされる事実だったのである。子供たちはいまでも山の中で實際眠り続けている。しかしそれは伝説がいうコッペンベルクやマリーエンベルクやタンネンベルクの山ではない。今なおアルプスのスプルーゲンやザンクト・ゴットハルトやウーリの無気味な谷間や恐ろしい山峽には名もない墓が、墓石もない墓が、幾千幾百となく伝わっている。

……筆者が述べた以上のような推論にたいして甚だ不都合なことに、このハメルンの吹笛きと全く同様趣旨の話は古代中国にも存するとのことである。しかしそれにもかかわらず以上の推論は歴史的にも相当程度の根拠があるもののように思われる。